

陳舜臣さんを語る会通信

NO.77 Aug. 2022

発行 兵庫県明石市北朝霧丘2-8-34

橘雄三方「陳舜臣さんを語る会」

Tel.078-911-1671

編集 「陳舜臣さんを語る会通信」編集委員

発行日 2022年8月1日

http://www.eonet.ne.jp/~yuzo/

初期の長編推理小説2作『天の上の天』、『黒いヒマラヤ』

本号では、『天の上の天』（1963 講談社、初出は『宝石』1963年9、10、11、12月号）と『黒いヒマラヤ』（書き下ろし 1964 中央公論社）を取り上げました。（編集委員 橘雄三）

陳舜臣 初期10年 単行本一覽		
西暦	題名 ★は短篇集	通信
1961	枯草の根	43
1962	三色の家	51
	弓の部屋	68
	★方壺園	53
	割れる	52
	怒りの菩薩	3
1963	天の上の天	77
1964	月をのせた海	57
	黒いヒマラヤ	77
	まだ終らない	78
	白い泥	78
1965	★桃源遙かなり	74
	神戸というまち	69

1966	炎に絵を	54
	影は崩れた	79
1967	阿片戦争	20
1968	濁った航跡	79
	★紅蓮亭の狂女	74
1969	玉嶺よふたび	41
	孔雀の道	41
	★青玉獅子香炉	19
	★幻の百花双瞳	75
	他人の鍵	68
	★銘のない墓標	81
1970	凍った波紋	80
1971	北京悠々館	80

西暦は単行本発行年

『枯草の根』で作家デビューした陳舜臣さん、最初の10年を取ってみますと刊行作品は左の表のようになります。1965年のエッセイ、『神戸というまち』と1967年の中国の歴史に題材をとった小説『阿片戦争』を除くと、あとはすべて推理小説です。

つまり、作家陳舜臣は、この時期の推理小説抜きでは語れないということです。

そういう意味で、左記表掲載の内、本通信未紹介推理小説を発行年順に全点、紹介してまいります。



『天の上の天』

主人公の人物紹介と導入

●浮田和夫 西原貿易東京支店勤務。三十四歳？一年前に神戸本社から転勤。妻康子とは本社時代に社内結婚。大学卒業以来三年ごとに転職を余儀なくされ、今の西原貿易は四度目の職場である。あまりにも裏切られどおしだったので、自分の運に自信を失っている。そして、西原貿易に就職して、今年はその「三年目の不運」の年である。そんな時に事件はおきる。

本社への出張から夜行で帰社した浮田和夫に、同僚の欠勤で、予期しない仕事、為替管理制度の規制をくぐりぬける手段である「預かり金」を取引先の指定人に持参する「はこび屋」を引き受ける羽目に。ところが、預かり金を持参した先で待っていたのは、血を流して死んでいる指定人らしき人物の死体で、持参金三十万円は宙に浮いてしまう。浮田は、心の揺れからこれを着服、逃亡者となり、真犯人を見つけ、妻と共に神戸へ向かう。

その他の主な登場人物

- 大垣清二 西原貿易経理部長
- 有本礼一郎 西原貿易本社営業部勤務。浮田の本社時代の同僚、一ばん仲がよかった
- 名倉 西原貿易東京支店長
- 福島圭造 西原貿易東京支店勤務

●水村英介 四十五歳。ブローカー。戦時中、徴用され、富田組に配属、S県K村H山で「華人労務者」の現場監督をしていた過去を持つ

●劉廷茂 新宿の中華料理店「紅杏楼」主人。「努力！有效果的努力！」が口癖。戦時中、日本軍により、天津の港から日本に連行され、S県K村H山で「華人労務者」として使役された。

●丁克智 「紅杏楼」の帳簿付け。一九二〇年、山東省生まれ。戦時中、劉廷茂と同じS県K村H山での経歴を持つ。課せられた運命を率直に認めようとしな

い彼はなにかと反抗、現場監督である「ハンチョウ」の虐待の餌食となった。頸に、その時受けた一筋の深い傷が残る。十八年後の今も、「ハンチョウ」を見つけ出し復讐しようと狙っている

●ハンチョウ 戦時中、徴用され、富田組に配属。S県K村H山「華人労務者」の現場監督。第六班班長

●広瀬警部 警視庁の警部

●赤根警部補 山梨県警の警部補

●笠本警部補 兵庫県警の警部補

●八木絹子 三十三歳。三宮の煉瓦通りにあるスタンド・バー「夕風」のマダム。住居は楠町のアパート



講談社単行本表紙

いけがみたかゆき

徳間文庫版『天の上の天』 井家上隆幸氏の「解説」より抜粋転載

（小見出し、及び傍線は編集委員）

一九六三年の神戸の貿易会社を舞台にしたミステリー、陳舜臣『天の上の天』には、たとえばコーヒー一杯三五円、一ドルは三六〇円、経理部長の月給が七万六〇〇〇円、バ

イのママを囲うのにお手当が五万円、コイルガールの報酬が二時間ぐらいで五〇〇〇円とあった、あの当時に体験している人間には懐かしい数字がさりげなく出てくる。

あの時代、六〇年安保闘争直後に就任した池田勇人首相が「所得倍増政策」をぶちあげて、日本は一気に「経済大国」への道をひたはしりはじめた。①

しかし、そこに生きた人間個々の生活はまだ不安がいっぱいだった。日本人にはまだ五〇年代の不況の記憶が根強く残っていて、その好況はじつは一時的なものであり、かならず不況がやってくるという漠然たる不安感があつたように思える。

『天の上の天』という小説の主人公というか狂言回し役の

浮田和夫も、そういう日本人のひとりである。だからとにかくなんとしてでも会社にすがりつきたい、そういう浮田和夫の気分は、当時のサラリーマンの大多数の心情でもあったといってい

『天の…』主題と在日中国人
丁克智を登場させた意図

陳舜臣氏は、「天はすべてを見通している」と、罪に怯え、やみくもに逃走をつづけ、しだいにその恐怖の重みにたえられなくなって「縮小」していく小さな「逃亡者」浮田和夫の心理の綾を、じっくりとみつめえがいていく。

藤と「縮小」が、この『天の上の天』という推理小説の主題であるが、その主題にさらに奥行きをもたせているのが、太平洋戦争末期、日本人によって中国から「華人労働者」として強制連行され、過酷な労働を強制され虐待された、丁克智という在日中国人の存在である。

ある事件や人に、それぞれは無関係な人間がともに関わ

れていくという手法で、懐の深い推理小説を構築していくのが、陳舜臣という作家の特徴である。

陳氏の作品は、読むのに、ある種の精神的緊張が求められる

展開するストーリーに身をゆだねていけば、事件は解決する。その間にアクションあり、ベッドシーンあり、「オカルト」的猟奇性ありの「ミステリー」は、読者になんどの精神的負荷をもかけないから、暇つぶしには恰好である。

その意味では、陳舜臣氏の作品は、読むのに、ある種の精神的緊張を求められる。だから、決して「今風」であるとはいえないが、しかし、ミステリーを読む醍醐味は、謎解きでありストーリーの進行であるとともに、そこに「人間観照」の眼がどれほど研ぎ澄まされてあるかということでもある。



徳間文庫版表紙

『天の上の天』補足(1) 題名の意味

犯罪者、逃亡者となって殺人犯を追う浮田和夫が感じた『天』とは。

「低い天が彼のうえにかぶさっている。その天には無数の目がついていて、どこからでも、彼の行動を監視しているのだ」（徳間文庫p. 239）「無数の目をもつというより、すでに天は『目』そのものではないか」（p. 278）「敵い**おほ**かぶさってくる『天』。いくら駆けまわっても、釈迦の手のひらから出られなかったという孫悟空のように、彼も『天』からのがれることができない」（p. 283）

結末です。「頭上すれすれまでかぶさっていた、あの執拗な『天』は、彼の幻想にすぎなかったらしい。そのうえに、ほんとうの『天』があって、それは、彼をまったく問題にしなかったというのだ。己

のつくり出した幻の『天』におびえていたわけだ。浮田は自分をこれほど卑劣なものと感じたことはない。ちっぽけな、虫けらのようにちっぽけな、あわれな人間。羞ずかしさのあまり、目のくらむ思いがした。」（p. 365）

『天の上の天』補足(2) 上梓内、傍線①の箇所



戦後の日本経済は、朝鮮戦争の特需景気、神武景気、岩戸景気、オリンピック景気と続いて、概して好況と見えた。

私(橘)が入社した一九六五年は、オリンピックの翌年で、就職難という記憶は無い。因みに、初任給は27,500円。

『黒いヒマラヤ』 作中時間は、1960年代はじめ、チベット反乱に続く時代 登場人物ほか

『黒いヒマラヤ』 主な登場人物ほか

●長谷川 ヒマラヤ学術調査団のカメラマン。軍隊時代衛生兵だったことがあり医学の知識がある。シッキムと印度の国境に沿った村、ルクラで、瀕死のチェンモ活仏に請われ看取る。頼み事をされたよう

●チェンモ活仏^{かつぶつ} チベット東部貧農の出。僧院に入り、三十代でダライ・ラマの役人に選抜されて南京に数年駐在。この時期、中国人女性に生ませ、満一歳の時に別れた娘がいる。

やがて、化身ラマに昇進。大地主、大農奴主でもある

●毛利哲夫 主人公、三十七歳。長谷川の中学時代からの友人。S物産のカルカッタ駐在員だったが会社が倒産、自由の身になった機会を捉え、長谷川とヒマラヤ山麓の町、カムドンで落ち合うことになりやってきた。彼のカルカッタのうらぶれた下宿の壁にはカンチェンジュンガのカラー写真が貼ってあり、その、人間のあざとさを超越した銀白の山姿は、いつも毛利の心を洗ってくれた。長谷川に会いたいということもあったが、朝夕写真でなじんだカンチェンジュンガを、いちど自分の目におさめたかったのだ

■ヒマラヤ学術調査団 十二人の学者、ジャーナリスト、カメラマンから成り、現地に三ヶ月ほど滞在する予定。地質学、人類学、生物学、民俗学、言語学などの専門家がヒマラヤ山麓各地の実地調査をする。調査



カンチェンジュンガ

団の主力は、すでにネパールに入ったが、数名がまだ印度領内のカムドン付近にとどまっていた

●白井博士 ヒマラヤ学術調査団員、動物学者
●白井久子 白井博士の娘。五年間、大崎俊夫と同じ研究室にいたことがある。東京でヒマラヤ学術調査団が結成されたときにはじめて長谷川を知った。「長谷川のことをほとんど知らないといえると同時に、彼のことがなら誰よりもよく知っているという気もした」

●大崎俊夫 ヒマラヤ学術調査団員、T大学の言語学の助教授

●勝田 ヒマラヤ学術調査団員、富士新聞記者。長谷川の同僚

●李修康 以前、国民政府の役人。チベットに駐在したことがある。当時、チェンモ活仏と懇意にしていた

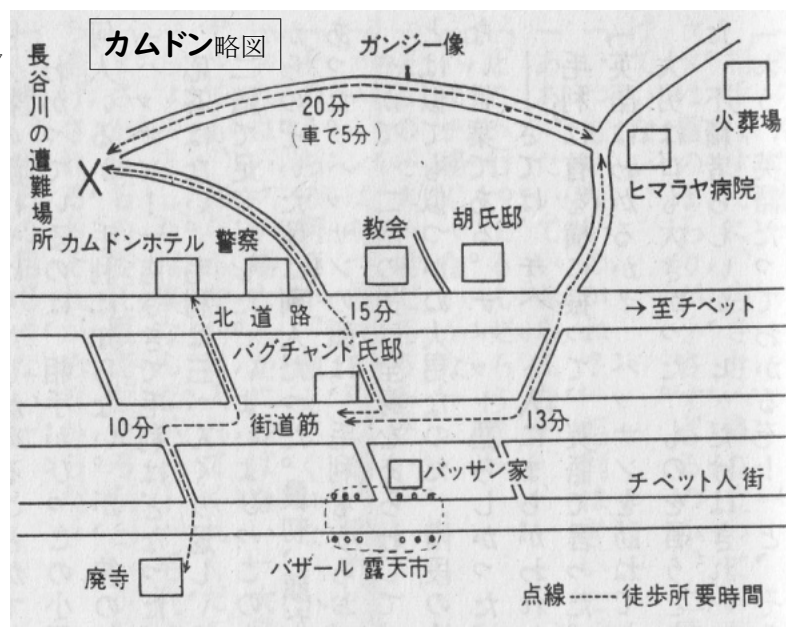
●李碧^{リー・ビ} 李修康の娘。長谷川の遺品、定期券入れに、「李碧」と書いた黄色い紙片が：

●フサイン カムドン・ホテル支配人。回教徒のインド人

●ミール警部 カムドン警察署警部。「ユーラシアン」と呼ばれる英印混血児であるということが負い目となっている

●莊赫黎^{ツァン} 甘頓中華学校教師、大男。東南アジアでの戦歴をもつ脱走兵あがり

●バツサン びつこの小男。父親は立派な宝石商。父の死後も看板だけはそのママ。宝石の鑑定眼はある。莊赫黎に二階を貸している。バクチのもとで稼ぎのためなんだってする



●胡明基^{フー} カムドンの紳商。李修康のチベット在任時代の友人。李修康に恩がある

●林淑瑤 十七歳。両親は雲南省出身の旅芸人。父は巡業中、カムドンで死去。母も三年前死去。ひとりぼっちとなり、胡明基邸の女中となる。莊赫黎を恩師と尊敬する

●ハート博士 ヒマラヤ病院の院長格。「ヒマラヤの聖者」の異名をもつ

●ウィルソン夫人 ヒマラヤ病院創設者ウィルソン博士の未亡人。七十歳に近い

●北見二郎 ヒマラヤ病院医師

●クリシュナ 若いインド人医師
●ジュリア・ハミルトン ヒマラヤ病院看護婦。ブロンド娘。ハート博士と親密な関係

『黒いヒマラヤ』 森村誠一氏「解説」ほか いくつかの補足

森村誠一氏「解説」、抜粋転載
小見出し、傍線、■は編集委員

推理小説、本格派と社会派

推理小説には一種の周期サイクルがあるようである。安楽椅子にもたれてパイプをくゆらしながら読む一握りのハイブラウ（■教養のある人）の読者のための読物から、社会派の推理小説は、大衆社会の読物として読者層を一気に拡大した。

これまでの、トリック中心の「英国紳士風知的遊戯読物」から人生のげいししい感触を感じさせる小説に止揚されたのである。

だが、推理小説に社会性（日常生活における人間の血の通った）を導入した結果、従来の探偵小説の現実離れした、夢とあやかしに満ちたロマンチズムが希薄になったことも否めない。

推理小説が、謎解き中心の虚構の物語から、日常的な人生の感触あふれる小説に脱皮したものの、かんじんの推理味がうすれ、一般小説との境界が曖昧になってしまったのである。

現実の殺人や凶悪犯罪に、読者は毎日接している。それを小説の中に置いてみて、リアリティに藉口しりぞしてこれでもかこれでもかと読まされたのではたまらぬ…。

『黒いヒマラヤ』は両者の美味なところを併せ持つ推理小説

さて前置きが長くなったが、私が言いたいところは、本書『黒いヒマラヤ』が、本格派と社会派の美味な所をすくい取ってつくりあげられたような推理小説であるということである。

この作品において、作者は本格の推理味を少しも損わずに宿命的な、現実ばなれと現実らしさという二律背反を克服して体質改造に成功したといえる。

ヒマラヤ山麓に作り出した架空の町「カムドン」

この作品の舞台は、ヒマラヤの世界第三位の高峰カンチェンジュンガの麓にある「カムドン」という架空の町である。それがあたかも実在する町のごとく、写実的なヒマラヤ風物と、生き生きした登場人物を伴って、作者の筆によって描き出される。

それは、色彩や音、街路や住人の生活の体臭までが感じ取れるような描き方である。舞台設定は、その小説の面白さを左右する重要な要素であるが、読者は、浮世の喧噪と俗塵から遠く離れた旧きよき探偵小説の世界に引き込まれたように感じる。

巧緻なトリックと「割れ」の妙

謎に包まれた中国人美女をはじめとして、宝石商、下宿人、ホテル支配人、死の武器商人、地元富豪、ヒマラヤの聖者と言われる医師など怪しい人物が右往左往する中に第二の殺人事件が発生して、謎はますます深まる。

複雑怪奇に錯綜した事件の系を、論理的に根気よく整理して、一步一步真相に近づいて行く過程は本格推理の醍醐味である。

犯人の仕掛けた巧緻なトリックとその「割れ」の妙も、本格ファンを堪能させる。ようやく到達したとおもった事件の真相の奥にもう一つの底が隠されていて、読者の構築した知的陥穽かんせいの中でおもугがままに翻弄される。ようやく突き止めた犯人の意外性も申し分なく、やれやれと息をついた読者は、またラストにおいて、痛烈などんでん返しを食わされる。



中央公論社単行本表紙

題名『黒いヒマラヤ』

「紺碧の空に、幻想的なカンチェンジュンガの真っ白な山姿」（中公文庫版⁷⁾。「人間のあざとさを超越した銀白の山姿」（p.14）など、カンチェンジュンガは「白」が強調される。それが、題名では『黒いヒマラヤ』と「黒」が冠せられている。難解な題が多い陳舜臣さんの推理小説ではわかりやすい。



熾烈なドラマを詩的文体で描く

ヒマラヤの霊峰カンチェンジュンガを背景に、聖都に突如起こった謎の連続殺人事件。秘宝をめぐるまさにおこる人間欲の熾烈なドラマを緻密な構成と詩的文体で描く。

右は文庫本のキャッチコピーです。確かに、『黒いヒマラヤ』には、詩的文体が頻出します。一例です。

いま、森は飽食した養分を喉からもどして、舌のうえにころばせている。懸命にかきこんでいるときは、生命保持の闘争という悲壮美もあった。だが、舌なめずりしだすと、いやらしさが拡大される。森は自分たちの汚濁が、すぐ目のまえにある清澄なカンチェンジュンガと対比されていることを知らない。むきだしの猥雑わいさつがそこにあつた。（p.262）